

高知市文化財調査報告書第8集

吸江庵跡発掘調査及び
新指定高知市保護有形文化財

昭和62年3月

高知市教育委員会

はじめに

本報告書は、昭和60年度に行われた高知市における文化財調査報告を収録したものです。内容は2部に別れており、まず、吸江寺本堂及び庫裡の改築に伴う県指定史跡吸江庵跡の発掘調査報告、続いて昭和60年度に新しく高知市の保護有形文化財に指定された、仏像2件、歴史資料（絵馬）1件についての報告から成っています。

本書をまとめるに当たり、発掘調査に関しては高知県教育委員会文化振興課山本哲也氏、また指定物件調査に関しては、高知市文化財保護審議会委員吉村淑甫、前田和男両氏をはじめとする関係諸氏の御指導とご協力をいただきました。皆様に厚く御礼申し上げますと共に本書が市民の貴重な文化遺産の保護・保存に役立つことを願ってやみません。

昭和62年3月31日

高知市教育長 森田 耕

目 次

はじめに	1
県指定史跡吸江庵跡発掘調査報告	3
調査概要	4
図版	11
昭和 60 年度新指定高知市保護有形文化財	15
円光寺の木造阿弥陀如来坐像	16
高蓮寺の木造釈迦如来坐像	18
夕顔鑑絵馬	20

県指定史跡 吸江庵跡発掘調査報告

— 吸江寺改築工事に伴う発掘調査の概要 —

調査概要

1. 吸江庵跡の位置

吸江庵跡は、高知市吸江字古寺（高知市吸江 122 番地）に所在する中世の寺院跡である。高知市の東部、標高 138.8 m の独立丘陵である五台山の西側斜面部に位置しており、周辺の標高は 12.00m を測る。遺跡の現状は宗教法人吸江寺の境内地となっており、東側は急傾斜地となっているが西からの展望は良く、浦戸湾一帯を眺めることができる。

2. 吸江庵跡の沿革

吸江庵は、夢窓疎石が文保二年（1318年）に建立したもので、土佐における臨済宗の道場として栄え、義堂周信、純庵中津などの高僧、名僧を輩出した。また、有力な中世寺院であったばかりでなく、中世後半期の土佐の文化の一翼を担った。室町時代には、所領を寄進する地頭等も多く、守護代細川氏からも保護をうけたが、戦国時代になると、莊園制の基盤にたった維持經營が困難となつたため、長宗我部氏の統制下に置かれることとなり、戦国時代末期には吸江庵も荒廃することとなつた。山内一豊が土佐に入国して以降、一豊の義子である湘南和尚が庵主となり、荒廃した吸江庵を再興して吸江寺を号した。

現在、宗教法人吸江寺が法灯を伝えている。境内周辺には石垣、石段等の吸江庵付属施設と考えられる遺構が残り、往時の名残をとどめている。吸江庵跡は、昭和28年1月29日に県指定史跡となり、保護措置が講じられている。また、吸江庵関係の史料として、木造地蔵菩薩坐像（重要文化財）、石茶臼（県有形文化財）、吸江寺文書（市有形文化財）があり、宗教法人吸江寺において保管されている。

3. 調査の契機と経過

宗教法人吸江寺の本堂及び庫裡は、明治年間に建築が行わされたもので、老朽化が著しく改築の必要が生じていた。昭和60年に至って、改築工事計画が具体化し、昭和60年中に工事を実施することとなつた。このため、高知市教育委員会では、宗教法人吸江寺と協議を実施し、高知県教育委員会の指導を得て、事前の発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、昭和60年8月21日から8月28日までの間に実施した。調査対象地は、吸江寺改築に伴う工事予定範囲である。調査は、対象地に5ヶ所のトレンチ（A～E トレンチ）を設けて、遺構及び遺物包含層の確認作業を実施した。

5ヶ所のトレンチのうち、A 及び B トレンチは本堂の周辺に、また、C 及び D、E トレンチは庫裡の周辺に設定し、発掘を行った。発掘総面積は、約34m²である。

調査では、吸江庵に直接関連する遺構及び遺物は確認されなかつたが、江戸時代に再興された吸江寺に関連する遺構等が検出され、また、旧地形の内容も判明した。

4. 調査内容

(1) 調査方法

本堂及び庫裡の周辺に、任意の発掘区を設けて、トレンチ調査を実施した。トレンチは、便宜上 A～E トレンチの名称を冠して区分することとした。また、発掘区の周辺については縮尺

$\frac{1}{100}$ で地形実測図を作成し、各トレンチについては縮尺 $\frac{1}{20}$ で遺構検出状態平面図及び土層断面図を作成した。なお、測量調査の基本高は、宗教法人吸江寺への進入道路上（市道・標高 1.40 m）から求めた。

(2) 各トレンチの調査概要

A トレンチ

本堂の南側に接して設定した、幅約 2 m 長さ 12.70m のトレンチである。基本層序は、I 表土で暗褐色腐植土、II 黄茶色粘質土、III 黄茶褐色粘土、IV 黄褐色粘質土、V 淡黄茶褐色粘土、VI 褐色粘土、VII 淡茶褐色砂礫土に区分される。なお、トレンチの東端には、暗灰茶色粘質土及び青灰色粘土が堆積している。

A トレンチからは、II 層上面で薄状遺構が検出された。また、III 層及び IV 層中から、瓦片・土師質土器片が出土した。土層の堆積状態から、III 層上面は近世の遺構面であり、III 層及び IV 層は整地土であると考えられる。なお、V 層以下は、自然地形であると判断される。

B トレンチ

本堂の西側に接して設定した、幅約 2 m 長さ 2.80m のトレンチである。基本層序は、I 表土で淡茶褐色腐植土、II 黄褐色粘質土、III 明黄褐色粘質土、IV 茶褐色粘土、V 暗茶褐色粘土、VI 褐色粘土、VII 暗茶褐色粘土、VIII 茶褐色粘土である。

B トレンチでは、トレンチ西側で基壇状遺構が検出された。遺構検出面は III 層下半で、III 層から V 層にかけて土師質土器片・瓦質土器片が出土した。また、VI 層以下は西側へ傾斜した自然地形であると考えられる。

C トレンチ

庫裡の西側に設けた、幅 1.10m 長さ 1.60m のトレンチである。基本層序は、I 表土で暗褐色腐植土、II 黄茶色粘質土、III 黄茶褐色砂礫土である。C トレンチからは、遺構及び遺物は検出されなかった。また、II 層は地山であり、土層の堆積は薄かった。

D トレンチ

庫裡の東側に設けた、幅 0.50m 長さ 0.70m のトレンチである。基本層序は、I 表土で暗褐色腐植土、II 茶灰色粘土、III 黒灰色粘土、IV 黄灰色砂礫土である。D トレンチからは、遺構及び遺物は検出されなかった。

E トレンチ

庫裡の東側に設けた、幅 0.50m 長さ 0.70m のトレンチである。基本層序は、I 表土で暗褐色腐植土、II 茶褐色粘土、III 灰色砂礫土、IV 黄茶色粘質土である。E トレンチからは遺構及び遺物は検出されなかった。

(3) 検出遺構

今回の調査では、A トレンチから薄状遺構が、B トレンチから基壇状遺構が検出されたが、C～E トレンチからは遺構は検出されなかった。検出遺構の内容は、以下のとおりである。

溝状遺構

Aトレンチ中央部で検出された。一段の石列によって構築されており、排水用の溝であると考えられる。幅42cm深さ12cmを測り、堆積土中から土師質土器片、瓦質土器片が出土した。出土遺物から、近世の遺構であると考えられる。

基壇状遺構

Bトレンチ西側で検出された。二段積みの石列がみられ、石列上面は盛土により壇状を呈している。Bトレンチ西側に、基壇をもつ建物址が存在していたことがうかがわれる。検出状態から、方形基壇であると推測される。近世の遺構と考えられる。

(4) 出土遺物

遺物は、Aトレンチ及びBトレンチから出土した。出土遺物は、いづれも細片であり、近世に属するものばかりであった。内容は、以下のとおりである。

近世陶磁器……皿、碗 瓦質土器……鍋、椀

土師質土器……皿、椀 烧塗壺（底部片）、瓦

土師質土器及び瓦質土器は、Aトレンチの溝状遺構、Ⅲ層及びⅣ層、BトレンチのⅢ層～Ⅴ層に伴うもので、AトレンチのⅢ層及びⅣ層とBトレンチのⅢ層～Ⅳ層は整地土層であると考えられることから、遺物も二次的に混入したものと推測される。なお、鎌倉時代～戦国時代に所属することが明確な遺物は出土せず、輸入陶磁器等も出土しなかった。

5. まとめ

今回の調査は、小範囲な発掘調査であったが、調査対象地について新たな知見を得ることができた。

調査の成果をまとめると、以下のとおりである。

- (1) Aトレンチから溝状遺構が、またBトレンチから基壇状遺構が検出された。Aトレンチ及びBトレンチから検出された遺構は、整地土層上面に構築されており、出土遺物等からみて、近世に属する遺構であると考えられる。
- (2) AトレンチのⅢ層及びⅣ層、BトレンチのⅢ層～Ⅴ層は砂礫混じりの硬質の堆積土で、整地土層と考えられる。溝状遺構及び基壇状遺構の基礎土となっていたり、土師質土器片、瓦質土器片等が出土した。遺物の内容から、江戸時代に広範囲な整地作業が実施されたものと考えられる。また、Aトレンチ及びBトレンチとともに、整地土層下に西側へ傾斜する自然地形が認められ、旧地形は西側へ下がる傾斜面を呈していたものと推測される。
- (3) C・D・Eトレンチでは、遺構及び遺物は検出されず、堆積土も比較的薄いものであった。
また、標高11.70m前後で地山土が検出されており、Aトレンチ及びBトレンチに比べて約50cm程度高い旧地形を呈していたことが確認された。
- (4) 溝状遺構及び基壇状遺構は、江戸時代に再興された吸江寺に関連する遺構であると考えられるもので、^[2]土層堆積状況からみて、整地作業の終了後遺構が構築されたものであると考えられる。また、Bトレンチ南側の石垣の上段部は、傾斜面を平坦化する整地作業に伴って構築された可能性が強い。

(5) 今回の調査では、吸江庵に関連する具体的な遺構を検出することはできなかった。また、中世に属する遺物の出土もみられなかった。

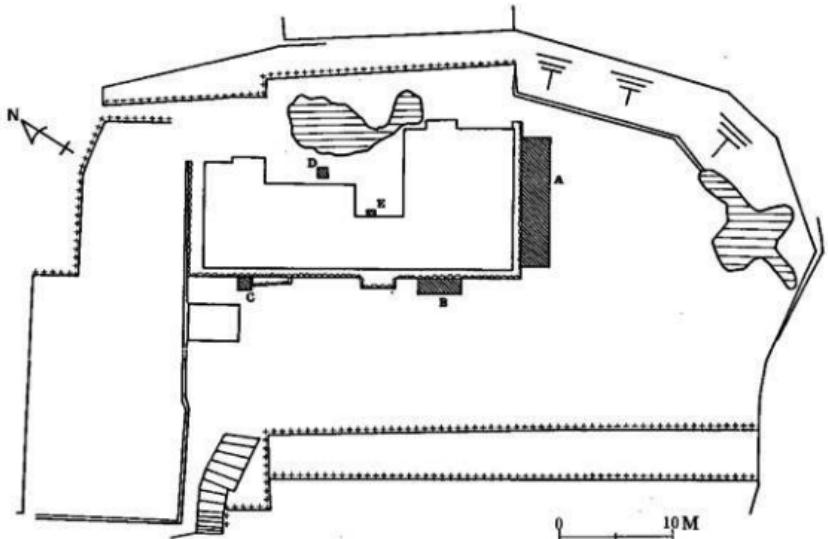
宗教法人吸江寺の境内地周辺には、石垣、石段、池等がみられる。これらの中には、創建当初の吸江庵に関連するものが現存している可能性もあり、今後発掘調査等を行うことによって内容が明らかにされるものと考えられる。

註

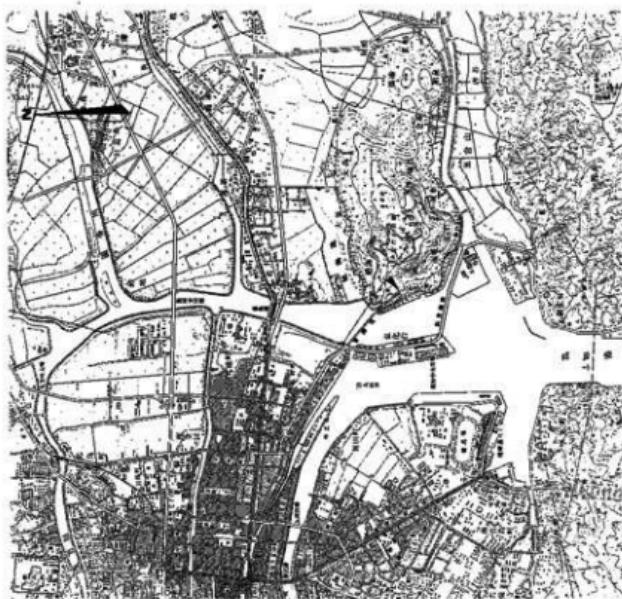
(1) 参考文献

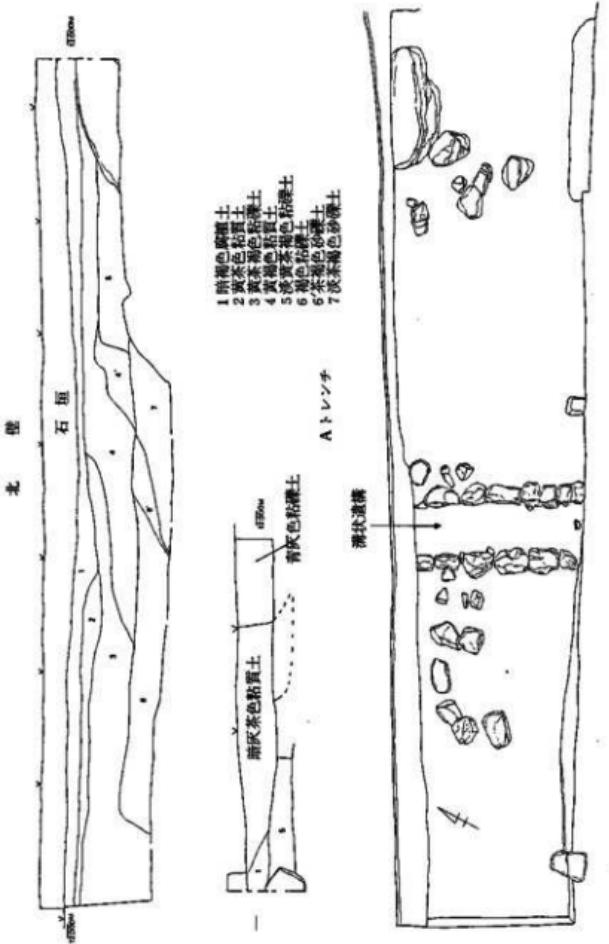
山本大 「第四章・中世の社会経済と文化」『高知県史』古代・中世編
昭和46年 高知県

(2) 吸江寺については、山内氏によって寺堂の再興等が行われたことが知られている。今回の発掘調査で出土した遺物は、細片の土器、瓦片等であり、溝状遺構及び基壇状遺構の明確な形成時期を探るには資料的に内容が乏しかった。従って、出土遺物の属する江戸時代のなかで、溝状遺構及び基壇状遺構が構築されたものと理解されるにとどまった。

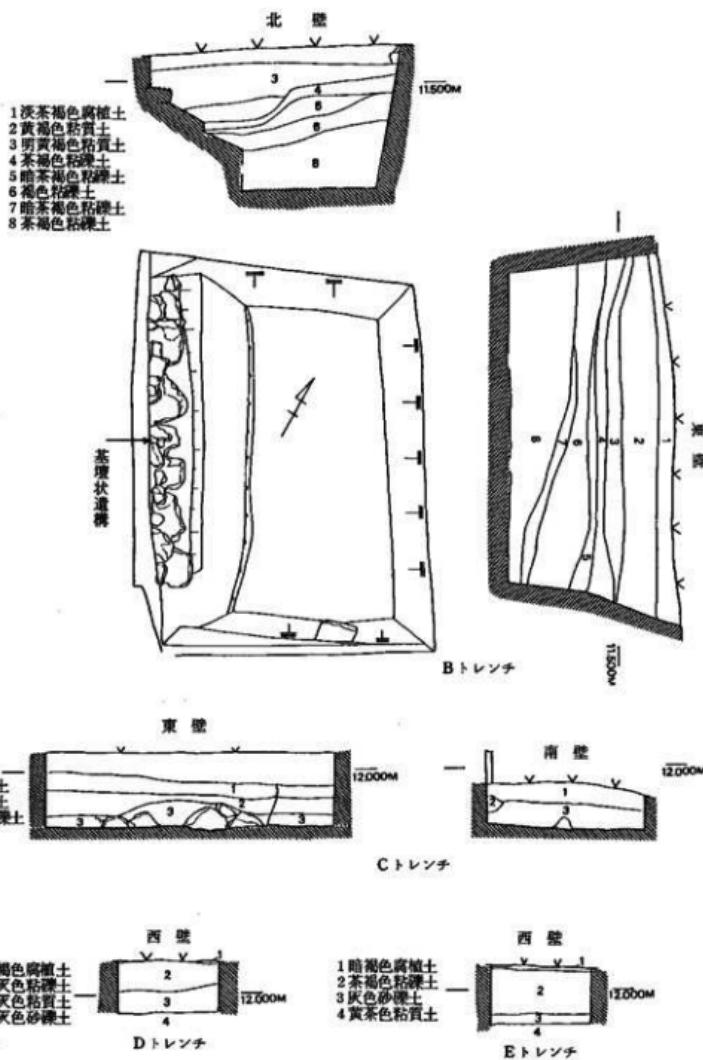


トレチ配置図





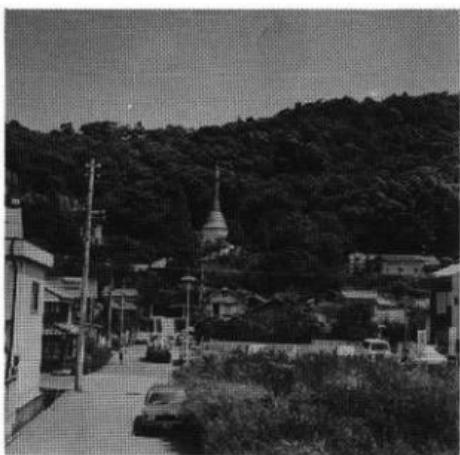
-9- A-トレチ平面図及び土層断面図 (1/60)



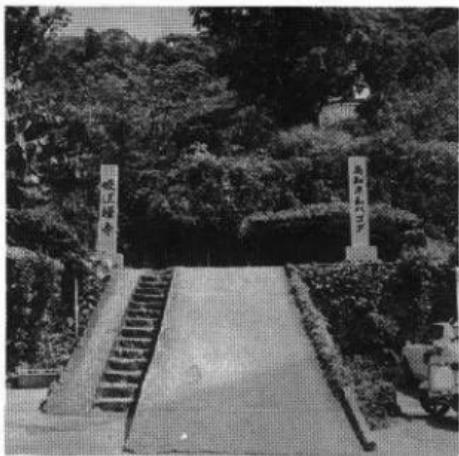
B トレンチ平面図及びB～E トレンチ土層断面図 (1/40)

版

図



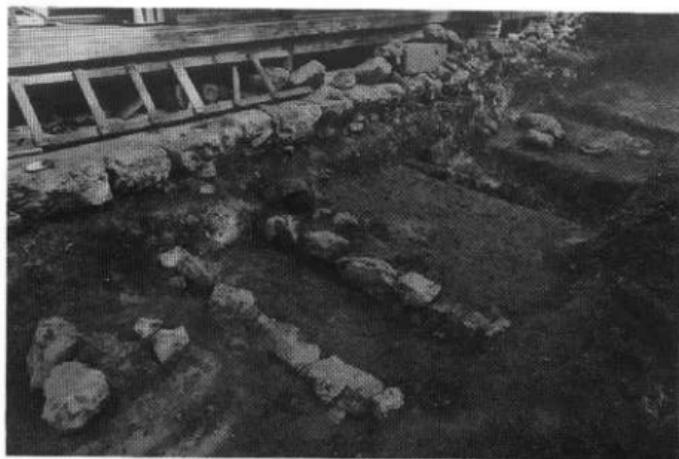
吸江廬跡遠景（西から）



吸江廬跡近景（西から）



A トレンチ設定状況（西から）



A トレンチ溝状造構検出状況（南から）



B トレンチ基壇状遺構検出状況（南から）



B トレンチ基壇状遺構検出状況（北から）



C トレンチ設定地近景（南から）



D・E トレンチ設定地周辺（東から）

昭和 60 年度新指定高知市保護有形文化財

円光寺の木造阿弥陀如来坐像

高蓮寺の木造釈迦如来坐像

夕顔鑑絵馬

木造阿弥陀如来坐像

一軸

高知市大津

円光寺

像高 133 cm

平安時代後期

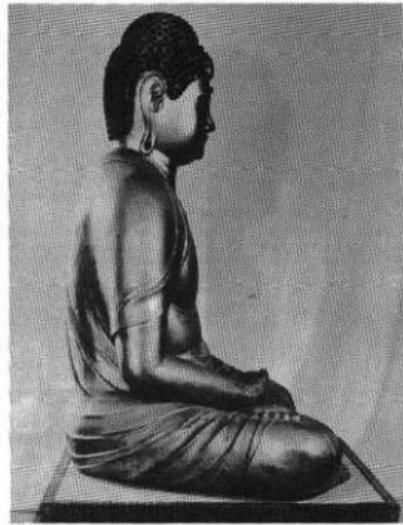
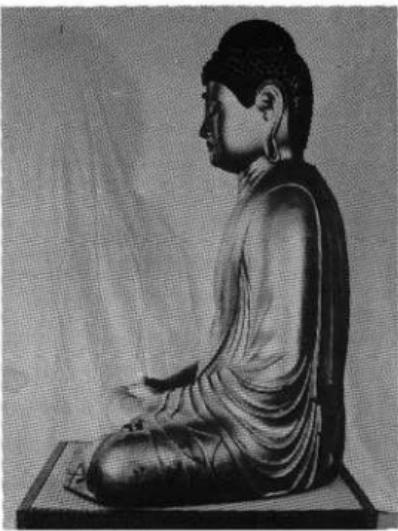
本像はヒノキ材、寄木造、彫眼の漆箔像で、螺髮に群青を施し、内削がなされている。着衣は屈右肩で、右足を上にして結跏趺坐し、上品上生の印を結ぶ。頭部は肉髻を半円形に高く造り、切付け螺髮とする。螺髮は髪際で24粒を数える。木寄せは、頭部は耳の後ろと頬骨のあたりで三材矧ぎとし、肉髻中央部を別材で矧ぐ。体幹部は近代漆箔を改めたこともあって矧ぎ目を知り得ないが、膝前は横一材を矧ぎ、左手首を挿込みとする。衣丈は浅く、丁寧に刻まれており、大小の波を揃えた翻波風の感覺を残しているものの、平安前期のような強い抑揚は見られず、形式化しており、平安後期の作風を見せていている。

面相は体幹部同様近代漆箔を改めたこともあって当初の趣をやや減じた感があるが、張りのある整った造りで頬部三道も明確に刻んでいる。胸から腹部へかけての肉取りもほどよく、肩幅は広く、がっしりした感じを受ける。膝張りも広く、全体によくバランスがとれている。今、雲先を欠き、左の衲衣先を損じているが、全体としては保存も良く、その文化財的価値は大きい。

尚、本像は円光寺に安置するために造られたものではなく、他から譲り受けたものというが、いづこの寺院より譲り受けたものか定かでない。（昭和60年8月21日指定）

（主要寸法）

頂—顎	42 cm	肘 張	82 cm
髪際—顎	23.5 cm	膝 張	103 cm
面 幅	21 cm	膝 高	19 cm
面 奥	29.5 cm	膝 奥	30 cm



木造釈迦如来坐像

一編

高知市朝倉

高蓮寺

像高 85cm

室町時代

本像はヒノキ材、寄木造、彫眼の漆箔像で、現在は素木造の如き感を呈している。内削を施す。着衣は偏袒右肩で、左足を上にして結跏趺坐し、右手施無畏、左手施与（与願）。第一指と第二指を抜する。の印をとる。頭部は肉髻が低く（肉髻珠はない）螺髮は小粒の切付け螺髮を丁寧に刻む。螺髮は髪際で29粒を数える。木寄せは、体幹部を前後矧ぎとし、両肩先で縱材を矧ぎ、頭部は一材で三道下で体幹部に押首としている。体幹部後方の衣丈は、両肩先の後方以外は全く刻まず、上下二材を矧ぐ。後世削り直したものか後補ではなかろうか。右手は臂と手首の位置でそれぞれ一材を矧ぎ寄せ、左手は前膊部を衣も含めて一材を矧ぎ、手首先は別材で彫って袖口に押込む。両脚部は横一材を矧ぎ、糞先を別材とする。胸から腹へかけての肉取りが薄く、右手前膊部から手にかけて彫りに不足を感じる。頭部と両脚部には虫害がみられ、右肩口を欠き、左手前膊部を剝離している。

本像は信仰の対象として、土地の人々との結びつきが深く、また、面長のよく整った伏目の穂やかな表情、抑揚には欠けるが丁寧に刻まれた衣丈、ほどよい膝張り等、全体的に迫力に乏しいものの、市内の室町期の仏像の中ではよくまとまった秀作といえる。（昭和60年8月21日指定）

（主要寸法）

頂一顎	28.5 cm	肘 張	53 cm
髪際一顎	18 cm	膝 張	72 cm
面 幅	15 cm	膝 高	14 cm
面 奥	17 cm	膝 奥	19 cm



夕顔艦絵馬

一面

高知市仁井田

仁井田神社

縦 89 cm、横 112 cm

本絵馬は、昭和56年末に仁井田神社拝殿で偶然発見された船絵馬で、向って右方に縱書で「夕顔艦運用方」との墨書きが認められることから、土佐藩船「夕顔丸」と推定された。全体に剥落が進んでいるものの、黒と黄の船体、三本のマストに張られた帆、一番高いマストに翻る藩旗と船尾側の日の丸等々、細々正確な船体図が描かれており、夕顔丸の航行する姿を充分にうかがえるものである。

本掲額は「夕顔丸」が仁井田村の土佐藩御船方所管となった時点で、1867(慶応3)年3月始め頃、運用方から仁井田神社に諸願成就を祈って奉納されたものと見られる。

夕顔丸は土佐藩船8艘のうちでも大型のもので、「勝海舟全集」13所収、海軍歴史卷の23、船譜の項によると、原名をスーイリン(朱林)という蒸気内車の鉄船で、長さ36間、幅4間3尺、深さ2間4尺、150馬力、659トン、1863年の英國製で1867(慶応3)年2月29日に15万5千ドルで長崎で購入されたと記録されている。

夕顔丸は1867(慶応3)年6月、坂本龍馬の「船中八策」が練られた船であり、また、同年7月の英國水夫殺害事件では後藤象二郎と英國公使バーチスとの談判の場になるなど、土佐の維新史の中で重要な役割を果たした藩船であるにもかかわらず、これまでその姿を知り得る資料は現存していなかった。この絵馬によって夕顔丸の外観が初めて確認できたわけで、維新史の資料として貴重なものといえる。(昭和60年8月21日指定)

奉上
新編
用

三

純成頤書

卷

吸江魔跡発掘調査及び
新指定高知市保護有形文化財

高知市文化財調査報告第8集

1987(昭和62)年3月31日

発行 高知市教育委員会
印刷 近森謙写堂